

## 翻 訳

## 西洋海軍の挑戦と中国海軍改革の遅れ

原著：John L. Rawlinson, *China's Struggle for Naval Development 1839-1895*,  
chap. II, pp. 19-40, Harvard Univ. Press, 1967.

ジョン・L・ローリンソン  
訳：細見和弘

敗戦は、改革を促す刺激として役立つ。ところで、中国は、アヘン戦争後20年を経て、はじめて現実の海軍改革を開始した。儒教的政治体制の組織及び価値基準が与件とされていたため、官僚の中で改革の必要性を十分に理解する者は、無条件では出現しなかった。それには、繰り返す衝撃を受けたり、思いがけないリーダーシップの変化を経験する必要があった。

アヘン戦争の期間中及びその直後には、海軍改革の議論に結び付きそうな活動が、いくつか存在したが、それらは移ろいやすかった。1840年に林則徐が「ケンブリッジ」号を購入したことに ついては、既に言及した。彼は、25トンの帆船2隻と小型外輪船1隻も購入した。西洋人の目には、林は侵略者を排撃するために新しい海軍を計画していると映った。ともかく、彼の船は、全 て捕獲された<sup>1)</sup>。

非常に興味深いのは、中国が改良された艦船や大砲を製造しようとした戦時中の試みである。これらの活動は、かなり広範に拡がり、広東や浙江、江蘇に及んだ。兵器の改良を除けば、関心事の大半は、〔蒸気で動く火輪船ではなく〕人力で動く「外輪船 (wheel-boat)」〔史料では水輪船〕の建造に集中した。外輪船は少なくとも、風の有無に関わりなく活動できるという点で「ネメシス」号とその類に似ていた。

外輪船を建造したのは、1840年に寧波で嘉興県丞〔知県の補助官〕に任命された龔振麟<sup>きょうしんりん</sup>である。彼がその試みをいつ始めたのかは、はっきりしない。林則徐がイギリス軍に立ち向かうのに失敗したため両広総督の地位を解任されたのち、1841年春に浙江に到着するまでは、おそらく始めていなかったであろう。今度は林の方が、広東塩務行政官の長慶<sup>ちやうけい</sup>が広東で試みた外輪船の影響を受けていたのかも知れない。ともかく、林則徐は、海軍改革に興味をもっていた。そして、恥辱を受けたからといって思い止まることはなく、8種の戦艦図面を浙江に持ってきた。大部分は伝統的な小型船の図面であったが、一つは西洋船であった。その船には、二つの甲板があり、3本のマストが立てられ、34門の大砲が搭載されていた。そして、一つは、外輪船であった。彼は、龔振麟と話をし、おそらく浙江巡撫劉韻珂<sup>りゅういんか</sup>の支持を得た。1841年春に定海奪還のため派遣された欽差大臣の裕謙<sup>ゆうけん</sup>も、関心を持った。ところが、林則徐は、浙江で約1箇月を過ごした後、伊犁<sup>イリ</sup>に送られた。そもそもの職務怠慢に対する処罰である。持続的な支援が足りなかったためか、時間が足りなかったために、外輪船は完成しなかった。そして、1841年10月にイギリス軍が寧波を占領したとき、彼らは、興味深いものだけれど組み立てられていない小型船や柱、外輪を見つ

けたのである。<sup>2)</sup>

龔振麟は、大砲にも興味をもった。そして、鑄鉄技術を考案した。それは、同時代の西洋で知られたものより進んでいた。<sup>3)</sup> 1841年に寧波でイギリス軍は、新しい真鍮製の砲も見つけた。それは、約3ポンド砲で、それぞれに二人用のハンドルが取り付けられ、「奇妙なことにガットで縛られていた」<sup>4)</sup>。

広東でも、実験が見られた。主として伝統的な型式の小型船とはいえ、長慶は、広州府知府易長華<sup>ちやうか</sup>と広東紳士の一員である許祥光<sup>きやうこう</sup>の仕事仲間であった。それで、多分これらの人々の努力は、実際の試み以上に公共的精神を示しているだろう。<sup>5)</sup> 潘仕成<sup>はんしせい</sup>も広東紳士に属していたが、それ以上に一人の革新者であった。長慶の外輪船に関心を持つだけでなく、1841年に「少しばかり外国製の模倣をして」大砲を鑄造した。1842年には、彼の「水雷」を創り出し、それをういて外国の戦艦を引き裂くことを望んだのである。<sup>6)</sup> 潘は戦艦も建造した。その船は、現地の艤装<sup>ぎそう</sup>をしているが、船体には外国様式で銅が張られ、二つの大砲甲板と「通常の舷窓」<sup>げんそう</sup>が付いており、36口径のリバプール製大砲を搭載していた。バーナードは、この船を銅張りのジャンク船と呼んだとはいえ、中国は「何らかの変革の開始に向けた大きな前進」を果たしたと結論を下した。<sup>7)</sup>

もう一人の広東の革新者は、広東にいた福建商人の丁拱辰<sup>ていきょうしん</sup>であった。潘仕成と共に、彼は砲と照準器を研究対象とした。1841年には蒸気推進力に興味を持つようになり、外輪船や鉄道エンジンの運転モデルを製造した。広東では工作機械が不足していたために、彼はこの将来性のある仕事を打ち切らざるを得なかった。<sup>8)</sup>

この最も重要な——蒸気力を用いた——試みは、普遍的な広がりを見せなかった。それを示すのは、1842年6月にイギリス軍が呉淞<sup>くわそう</sup>を占領したとき、「ネメシス」号が人力で動く5隻の外輪船をたやすく捕獲したという事実である。これらの新しい伝統的武装船は、約3ノット〔時速約5.6km〕の速度しか出せなかった。しかし、少なくとも猛烈に働く人間の「エンジン」が甲板の下にあり、守られていた。この江蘇の造船事業の背後には、南京の総督〔两江総督〕である牛鑑<sup>ぎゅうかん</sup>が立っていた。<sup>9)</sup>

戦争の終結後、1842年の末には、将来有望な他の試みがあった。広東では、潘世榮が洋匠を雇用し、小型汽船を建造した。ほぼ同時期、龔振麟と二人の同僚である丁守存<sup>ていしゅそん</sup>と鄭復光<sup>ていふくこう</sup>は、蒸気機関に関する研究を始めた。鄭復光らは、その著述の経過を詳細に叙述している。<sup>10)</sup> 戦後に現れたもう一人の実験家は、広東の呉建勳<sup>ごけんくん</sup>であった。呉は、野心的ではあるが、おそらく大して先見の明をもたない人物である。呉は、3本マストの米国戦艦を模倣する無難な方法を取り、全長約150フィート〔約45.7m〕の戦艦を造らせた。その戦艦は、外国式の艤装と外国式の船体を持ち、50門の大砲が搭載された。<sup>11)</sup>

しかし、この仕事の全ては、新規であるか伝統的であるかにかかわりなく、大抵は他に例を見ない出来事の集合に過ぎなかった。中国は財力が充分でなかったから試みを維持できなかったと説明するのではなく、相対的に言えば、中国は汽船建造者に上手く技術を授けられなかったとはいえ、技術が不足していたと説明するのでもない。<sup>12)</sup> 主要な問題は、官僚の態度が試行を妨げたことであった。アヘン戦争期における中国高官の建議の大部分は、海軍改革の必要に全く気付いていないことを示していた。戦時の上奏文は、伝統的な題目について以下のように華麗に作り上げられていた。すなわち、通商の一時停止という攻撃手段は、有利に使用されたかもしれない。凶

暴な蕃人は、不遜であるとはいえ、中国が現在所有する武器と道徳的優越性により敗北させられた。蕃人は、上陸した後で陸上で一掃されるべきであった。もっと多くの要塞が建設されるべきであるか、あるいはジャンク船が港に沈められるべきであるか、あるいは軍勢が集められるべきである。漁夫は、敵の艦隊に潜入して偵察するか、それらを妨害すべきである。潜水夫は、敵艦の底に穴を開ける、等々である。<sup>13)</sup>

記録の中には、二三の例外が見られる。それらは全て、1841年の春に林則徐が広東の職を解任される以前のことである。林則徐、鄧廷楨、<sup>きしゅんそう</sup> 祁 雋 藻、<sup>こうしやくじ</sup> 黃 爵 滋、<sup>こぶんよう</sup> 吳 文 鎔、<sup>イリブ</sup> 伊里布の名前が、(時には1840年7月に鄧や祁、黄、呉と連名で出された上奏文と同じように) これらの建議に添えられた。しかし、一つの提議より以上のことを行ったのは、林則徐と鄧廷楨の二人だけである。<sup>14)</sup> これらの提議は、通常やや全般的なものであり、より詳細に踏み込むことはなく、大型艦船を要求するだけであった。鄧とその同僚は、1840年7月に、30~40門の大砲を搭載するに足る60隻の大型艦船を求めた。1840年10月に、林則徐は、長期計画に基づく大型艦船の建造を提唱し、関税収入から資金を調達するよう提議した。<sup>15)</sup> 1841年、任務を解かれた後ではあるが、広州を出発する前に、林は<sup>えきざん</sup> 突山 (林の欽差大臣の役目を直接引き継いだ琦善の後任として到着したばかりであった) に対し、中国は長期計画を立てるよう提案した。計画には大型艦船の建造が含まれており、4箇月は月産5隻の進度で進め、以後は進度を落としながら100隻に至るまで建造するとされた。<sup>16)</sup> 林は直接上奏できなかつたので、多分この最後の項目は、皇帝への献策の中には当然含められなかつたであろう。ともかく、林ですら中国による軍用汽船の建造を公然と信奉することまでは許されなかつたのであるから、献策の中には多くを付け加えられないのである。

漠然としたものであるけれども、これら二三の提議ですら、北京を通過する上奏文の流れの一部に過ぎなかつた。その大部分は、既に提議された旧来のものの焼き直しか、裕謙による上奏文の類であった。すなわち裕謙は、1840年9月に、イギリス海軍砲は、呉淞の要塞を破壊するほど高所には大砲を放てない、というも「もし彼らが大砲を上に向けて放てば、砲弾は高度を落とし、結局は砲撃力を失う」からであると皇帝に断言したのである。<sup>17)</sup> 大型艦船を要求した時ですら、鄧廷楨は、敵軍を陸上で打ち負かすことを強調したし、林自身は、1840年8月の上奏文の中で、「海戦に乗り出すことは、時間と労力を費やすに値しない」と同じ上奏文の後半部分で指摘しながらも、海洋に出て全滅させることを求めた。<sup>18)</sup> ともかく道光帝は、海戦に興味を持たなかつた。そして、大型艦船を求める建議を帝が無視しなかつた時であっても、1840年10月の林則徐による建議と同じように、帝は「でたらめの言葉」として却下したらしい。<sup>19)</sup>

かくも少数の中国官僚が、振り返ってみて明らかに必要と思われるもの——海軍改革——を悟ったことは、彼らの教育と政治状況が生み出した産物であった。敵国に関する無知が広く行き渡っていた。その好例として、イギリスの軍装はとても窮屈なので、一度イギリス人が殴り倒されると、彼らは立ち直ることができないと真剣に報告されていたことが挙げられる。<sup>20)</sup> 情報源は、漁夫か、あるいは彼らと同様に未熟な観察者であった。1839年11月の川鼻の戦いの直後、林則徐が中国はイギリス人に「6発の猛撃」をお見舞いしたという最初の考えを呼び起こした理由は、林が漁夫の報告を受け取ったからであるが、漁夫はたまたま水面から英国海軍の帽子を見つけ、そうした小物を中国が勝利した証拠であると解釈したのである。<sup>21)</sup> 1841年にイギリス軍の(実際に解放後の) 広州撤退に関する見解の一つは、イギリス人は、神の慈悲が町の空に舞うのを見ながら

立ち去ったというものである。<sup>22)</sup>

なかには学習した官僚もいた。林則徐は、西洋情報を収集した。1840年末に蕃人を「慰撫する」ため林則徐の後任となった琦善は、炸裂する発射体や武装した軍人首席について賞賛して話すようになった。<sup>23)</sup>しかし、こうした高官たちが立て続けに処罰されたとき、高官の中で速やかに人事異動がなされたために、彼らの断片的知識は、ほとんど目的に合致しなかった。林の権力は、琦善に渡った。琦善もまたその一部を失って、奕山に移行した（彼は、緊急事態を仲裁する役目を担う3人のうちの一人であり、僅かに1841年の晩春における広州解放の手筈を整えることができたのみである）。奕山自身は、短期間の処罰を受けた。もう一つの高官の異動例——浙江における——は、既に第一章で述べた。他にも数多く存在する。他方、たとえ少数の「専門家」が解任されなかったにせよ、彼らの知識は、怒りを和らげるための論拠として上手い具合に役立ったであろう。1842年に南京の総督〔両江総督〕牛鑑は、戦争末期に蒸気機関室を見た。そしてようやく、このような船は、隠れた牛たちが動かすのでないと確信した。——そして彼は、賢明にも自分の名前を和平の嘆願に結び付けたのである。<sup>24)</sup>

在職者の異動の速さは、高官の政治状況を規定する一機能であった。はっきりした指令系統が欠如しているため、（直接建議権を持つ）これらの官僚たちは皆、皇帝に対して個別分散的な指令系統の末端に立っていた。このことは、行き過ぎを抑えて均衡をとるには優れていたが、海軍実験の緊急支援には良くなかった。海軍改革は、十分な公的支援を必要としていたのである。ところが、満漢儒教体制の中では、広い見識を持った官僚ですら、概して他のことに気を取られて、公的支援を与えることができなかった。彼らは、個人的な経歴のために用心しなければならなかった。皇帝は常に官僚を罰することができた。そのうえ儒教的な価値は、公正な役所による道徳的支配の外側で失敗の状態になる可能性を認めなかった。軍用汽船に必要とされるような異国の技術的研究は見下された。ところが一方で、中国で長い歴史を持つ外輪船は、そうした研究を必要としなかったのである。<sup>25)</sup>遠方の京師に在任する監察官は、中国の敗北に関する後続情報を書く告発文の中には技術的な事柄を考察しそうになかった。受け容れられた常套句の背後に隠れるか、あるいはせいぜい漠然と「大型艦船」について書くほうが、無難であった。本物の革新者を庇護するものは、何もなかった。

もし身振りが常軌を逸していなければ、処罰すら軽減された。ワレー（Waley）がアヘン戦争の記録の中に書き記した諸報告の中には、儀礼的な自己卑下、「反抗的な蕃人」に関する酷評、好都合な話の「激しい奪い合い」が見られるが、<sup>26)</sup>——全ては、全人は天子を中心とする道徳律の中で然るべき地位を占めるといふ儒教的世界観から生じた。ただの蕃人の手にかかって敗北したと報告するのは、二重に困難であった。本当に純粋な人の中には、その新しい状況を信じたいと感じる者がいた。1840年に林則徐は、英国艦隊が途中で広東を封鎖するという信頼性のある助言を信じたくはなかった。そんなことは、大きなお世話なのだ！<sup>27)</sup>

官僚たちは、戦争の経過を報告する際に、曲解という手段に広く訴えた。これは、部分的には、官僚たちが、しばしば不慣れな場所から場所へと遷るために、既得権益をもつ地方関係者や事務方の協力を得ようと御機嫌を伺うことを強いられ、それで皇帝に伝達するに当たって、彼らに回覧する報告を点検する際に、神経を使い過ぎたくなかったからであろう。ともかく、敗北の体裁を取り繕うための首尾一貫した努力があった。海戦は、外国艦船が参加するために、証拠につい



ては曖昧且ついい加減になることに適していた。なぜなら、外国艦船は、その等級の格付けが異国風であり、且つその活動は遠く離れ、込み入っていたからである。ところで、道光帝はいつも欺されてばかりではなかった。帝は、数多くの情報源を持っていたのである。(1841年5月に) 広東で巨大な火船を使ってイギリス軍を攻撃したのであるが、これを勝利と偽って報告された時、帝は怒って自分はもっとよく知っていると言い返した。そして、厳しい警告を発したのである。他方、後に定海で(1842年5月に) 敢行された火船による攻撃に関する同様の虚偽報告は、調査後ですらあったのに、大目に見られた。<sup>28)</sup>

用心深くしていたにもかかわらず、戦時期の高官たちは皆、実際に降格処分にされたり、または解任された。恥辱を免れたのは、極少数であった。1841年に琦善の後任となった3人の官僚の中の一人、楊芳<sup>29)</sup>は、短い在任期間を終えて私生活に戻ることに——「失敗した者に寛大な異例の裁決」——を許された。耆英<sup>30)</sup>も生き残った。しかし、1842年夏の南京における満洲側の交渉者であるこの男は、終戦の直前に戦いに加わったのであり、宮廷に多くの友人がいた。

革新が官僚体制及びその価値基準によって阻止されたことをより顕著に示すのは、上述したような革新のほとんど全てが、官僚体制の部外者によって始められたか、あるいは官僚体制の内側であっても、ただ下っ端の者と共同で始められただけという事実である。許祥光、丁拱辰、潘仕成、潘仕榮<sup>31)</sup>(蒸気機関を完成させた唯一の者)は、全て広東紳士か商人であった。易長華と長慶は、実は革新者ではなかったが、広東の下級官僚であった。龔振麟は、寧波の政務官であった。そして彼は、官僚ではない二人の協力者と共にしていたが、蒸気機関に関心を持っていたとはいえ、直接上奏する権利を持たなかった。広東の易と長も、持たなかった。リストには提督と林則徐が含まれていたが、林は、「大型艦船」を唱道する間に政治的評判を失墜させていた。呉建勳提督の運命は、手短かに記述されよう。

道光帝のパーソナリティは、政治状況の中で重要な要因であった。全面的に陸上で戦闘することに帝が長らく固執したこと、帝の不信感や優柔不断、直情は全て、帝の官僚たちに負わされた重責を増幅させた。<sup>32)</sup> 当時は和平を求める官僚の叫びが高揚していたものの、帝が大型艦船にたとえ漠然としてではあっても差し迫った関心を表明するようになったのは、やっと1842年の夏にイギリス軍が深く長江に入り込んだ時であった。<sup>33)</sup> 道光帝が大型艦船への関心を持ち始めて以来、1843年の初めに帝が関心を失うまでの間に、その問題に関する指令を約30件ほど出した。それらは、「変革する必要がある」とか、「我々は昔の方法を踏襲してはならない」という言葉に満ちていた。<sup>34)</sup> ところが、これらの指令からは、ほとんど何も生まれなかった。

おそらく最も興味深いやりとりは、北京と広東との間で交わされた。1842年9月に道光帝は、他〔福建・浙江両省〕の督撫と同様に、広東省の督撫に大型艦船を建造するよう命じ、計画を立てるよう指示した。帝は広東省の督撫に丁拱辰が実行していたことに関するより多くの情報も求めた。——この戦後の要請は、どうやら戦争初期に丁が彼の仕事に関する報告書を広東官僚に最初に提出してから約30箇月後に着いたらしい。大体同じ頃に道光帝は、浙江省の官僚に何礼貴<sup>35)</sup>に関する状況について尋ねた。何礼貴は、外国の造船所で20年余りの海外経験をもつ広東人であった。<sup>34)</sup>

広東省からの返答は、奕山が書いた。そして、それは10月末に受理された。奕山による詳細な報告書は、許祥光、長慶、潘仕成、それに呉建勳提督の仕事を包括していた。呉による米国船の

模造について、奕山は、それが最大級というよりも、むしろ中型船に属しているとして推薦している。奕山は、（呉建勳、易長華、長慶、潘仕成、許祥光による）軍船の五つの船型を付け、適当な海軍計画は、30～40隻の小型船が仕える30隻の「大型軍船」を含むよう促した。道光帝は丁拱辰に関する問い合わせの中で「火輪船」に関心を示していたが、奕山の報告書は、蒸気機関の計画を書き込んでいなかった。にもかかわらず、皇帝は満足し、潘仕成を広東に拠点を置く造船事業に配属し、閩浙〔福建と浙江〕や江蘇にも拡げるよう指示した。省の当局者は、どれが最善であるかを決定するために五つの船型を検討することにした。資金は、旧型船の修繕からこの新規の建造に転用されることになった。<sup>35)</sup>

1842年10月末、当時、道光帝は今や海軍改革に「転向」し、大規模な海軍刷新の創出に向けた計画の中で、省の高官（宮廷の一族でもあった）と手を組んでいた。しかしそれは、海軍改革にならなかった。奕山の運命が、教訓になる。奕山は、広東での地位〔靖逆將軍〕にまだ居座っていたとはいえ、1841年には、失敗を犯した廉で約1年間官位を剥奪されていた。1842年8月に南京条約が締結されると、奕山は、処罰を受けるため北京に戻るよう命じられた。奕山は、広州に十分に長居して、潘仕成の蒸気機関に否定的な報告書を12月に作成した。<sup>36)</sup>そして、収監されるため京師に到着したのは、1843年の初めであった。広東での造船事業は、後継者の祁項総督により引き継がれた。1842年末に祁項は、潘仕成が〔造船を〕開始し、資金を必要としていると報告した。資金の調達について、祁項は、伝統的な船の修繕を全面的に停止するのは無駄が多いと指摘した。寄付金〔による資金調達〕が了解されたのかも知れないが、祁項の報告書は、概してそうした平時の奮闘の中に含まれる問題を強調した。<sup>37)</sup>人は潘仕成が本当に開始したことを疑ったのかも知れない。ともかく、唯一取られた具体的な処置は、潘正煒と伍秉鑑という二人の商人による、108トンの「ラミロ (Ramiro)」号と317トンの「リンティン (Lintin)」号という2隻の外国帆船の購買を伴った。バーナードは、2隻の船が「かなり高額で」購入されたことを認めているが、おまけに船が「かなりの使い古し」であったことを書き記している。<sup>38)</sup>この購買とともに、広東での海軍の革新は終わりを告げた。

祁項は、奕山の運命によく気付いていたかも知れない。奕山の運命は、道光帝の海軍改革思想を支援したところで、決して好転することはないのである。熱意が足りないのは、祁項一人だけではなかった。1842年の末に、両江総督の耆英は、5種類の型式の軍船（そのうち幾つかは伝統的な船）について否定的に報告し、伝統的な軍船の同安梭船（福建が生産地）を中心とした建造計画を提議した。この提議は裁可され、部分的に潘仕成が提案した先例に重なり合う一つの計画ができた。<sup>39)</sup>1843年の春に、耆英は欽差大臣として広東に派遣された。他省の当局者も、潘仕成の船を使用する見込みは薄いという見方をしていた。例えば、直隸省当局は、「天津の近海は、……〔原註：潘の船には〕狭すぎるし浅すぎる。代わりに商船が使用されるだろう。」と主張した。山東や江蘇、浙江（後二者は1842年末に同安型に託していた）は、より有益なものは皆無であると言いつつ、<sup>40)</sup>海軍改革に向けた道光帝の東の間の意気込みは、浅はかな理解に基づいていた。成し遂げられたことは、極少数の官僚を説得して、彼らに如才なく外国製の軍用汽船を訪問させるに止まった。そうした外国汽船の視察は、幾度か実施された。<sup>41)</sup>

丁拱辰の描いた大砲の図面は、最終的に皇帝の御前に置かれた。諸省は、どこもかしこも改良照準器を採用した。しかし、より踏み込んだ実験はしていなかった。潘仕成による「水雷」は、

公式の試験を受けていなかった。<sup>42)</sup>戦争は、戦略思考には何の効果もなかった。魏源は、よく引用される1842年の『海国図志』の中で、海軍の強化を唱えたものの、「外洋の防衛は、港の防衛ほど重要ではなく、港の防衛は、内河の防衛ほど重要ではない」と自信をもって主張した。<sup>43)</sup>

アヘン戦争は、伝統的な水師を弱めただけである。そして1844年に、『チャイニーズ・レポジトリー』は、「呉前提督は、最近官位を剥奪された。……最初の降格の際に、彼は、この省の沿岸にある海に派遣された。海賊を撲滅することで、評判を取り戻すためである。巡航すること5箇月、国庫からは幾千もの費用を費やしたのち、彼は3人の海賊を捕まえたことを報告した。」と読者に知らせた。<sup>44)</sup>ここには、もう一人の革新者の運命があった。

また1844年には、ケイレブ・クッシング（Caleb Cushing）が中国に来た。アメリカ合衆国にとって、彼の外交官としての存在は、新時代を象徴していた。クッシングは、中国政府への贈り物として、大砲や艦船、要塞、陸海軍戦略に関する技術的な仕事を一緒に持ってきた。しかし、使用されなかった。中国は、海軍革新の準備がまだできていなかった。

中国の次の挑戦は、内側からやって来た。甚大な被害をもたらした太平天国の乱（1850-1864）の根源は、不正と無能の度を増していた官界に対する民衆の不満であった。また民衆の不満は、土地所有や社会的な不正にも向けられていた。実際、中国の19世紀初めの数十年に傷跡を残したのは、一連の叛乱の中で最大のものだけである。中国儒教官僚にとって紛れもなく、ここには王朝衰退の徴候があった。ところで、太平天国の乱も、西洋の衝撃（Western impact）を象徴していた。というのも、運動のイデオロギーは、もともと叛乱の指導者である洪秀全<sup>こうしゅうぜん</sup>によって宣伝された似而非キリスト教であった。後の段階になると、叛乱は、王朝の代わりに——すなわち、1860年に西洋により西洋との貿易及び外交に追加的な譲歩をすることを強いられてきた王朝の代わりに——外国の介入も招いた。19世紀における王朝の衰退は、——われわれが見るように、中国官僚たちが旧来の方法でそれを説明しがちであったとはいえ——中国の長い歴史における他のいかなる王朝サイクルの段階とも似ていなかった。

太平天国の乱は、アヘン戦争よりも、王朝の現存を脅かす遙かに深刻な脅威であった。しかし、この奮闘期間中、軍用汽船の使用に関する官僚の関心は、孤立して存在するに止まった。兵器供給の拡大・改善に向けた官僚の関心の方が、遙かに大きく存在した。満洲儒教王朝〔清朝〕を救うため多大な仕事をした曾国藩<sup>そうこくはん</sup>と左宗棠<sup>さそうとう</sup>は、湖南省に兵器製造工場施設を設立した。曾は、外国製の大型砲を探し求めた。左は、1854年に彼の兵器製造工場に龔振麟を招こうとしたが、上手くいかなかった。1855年に、両広総督の葉名琛<sup>ようめいちん</sup>〔任期は1852年2月～1857年1月〕は、カノン砲の製造工場を設立するために潘仕成を雇った。叛乱の鎮圧に奮闘するに当たり大砲と武器が必要なことは、交戦中の全官僚にとって明白であった。<sup>45)</sup>

汽船を含む外国船を実際に購買か賃貸しようとした一人の官僚は、上海道台の呉健章<sup>こけんしょう</sup>であった。1853～54年に、〔小刀会<sup>しょうとうかい</sup>が占領する〕上海を清朝正規軍が包囲していたとき、彼は、汽船を得ることはできなかったものの、上海防衛のため艦船の購買に積極的に動いた。1856年に上海当局は、430トンのラッセル商会（ex-Russell and Company）の汽船である「コンヒューシャス（Confucius）」号<sup>46)</sup>を購買した。上海と寧波の商人も、海賊の内航路の障害を取り除くために2隻の汽船を購買した。しかし1856年に、これら2隻の汽船が、太平天国軍鎮圧戦を指揮する欽差大臣

の向榮のもとに送られた時、向榮は汽船は必要でないと言い、それらは外国の影響を国内に持ち込むだけであるとした。<sup>47)</sup>長江水師に汽船を使用することに照準を定める政策も存在しなかった。そうではなくて、戦闘の緊急事態に対する個人的な反応だけが存在した。1856年に、揺籃期にある海関行政の長〔総稅務司〕であるホラティオ・ネルソン・レイ（Horatio Nelson Lay）は、中国は汽船を購入して叛乱を潰滅させるよう提議した。資金は、この表向きの目的のため彼の手元に預けられた。ところで、レイに関わった官僚の腹中の目的は、かれの誠実さを試すことであった。<sup>48)</sup>そのエピソードに関しては何も起こらなかった。1854年から1857年まで浙江巡撫を務めた何桂清は、海軍改革を力説した。しかし、信用を失っていた。<sup>49)</sup>

汽船に無関心なのは、叛乱軍自身が伝統的な長江水師と戦うという事実主に起因していたのかもしれない。1850年代の中葉に、曾国藩の海軍司令官である楊岳斌と彭玉麟は、長江及び鄱陽湖での水陸連合により重要な勝利を得た。1854年12月の一つの勝利で、これらの司令官は、叛乱軍の強力な水陸戦線を突破した。それは、長江流域において九江の上流約40マイル〔約64km〕にあった。そして、咸豊帝は、この伝統に基づいた〔つまり汽船を使わない〕戦闘の話<sup>50)</sup>を清国中の海軍官僚が見習うべき手本として使用した。

1850年代前半に、叛乱軍が海軍改革に何の刺激も与えなかったのであれば、条約を締結した列強国も与えなかった。〔中国と西洋諸国との〕関係は、1856年に至るまで建前上は平和であったからである。それに、イギリス軍が沿海の海賊の鎮圧に積極的に参加した事実は、中国側に海軍改革について心地よい受動性を促した。

しかしながら、1850年代後半に、中国は、再びイギリスと戦争状態にあることに気付いた。そしてこの時イギリスは、フランスにより軍事的に支援されており、そのうえアメリカ合衆国とロシアからも色々な外交上の支援を受けていた。清米望厦条約（1844）は、12年内かあるいは1856年に改正することが規定されていた。最惠国條款により、条約を締結した他の列強国は、条約改正に対し同様の権利が与えられたのである。西洋諸国は、南京条約に不満があった。アメリカ合衆国による改正の企ては、知らないふりをされていた。当時イギリスとフランスは、共同で改正に努めていた。〔後に登録の期限切れが判明するのであるが〕香港籍に登録され英国旗を掲げていたにもかかわらず、1856年〔10月8日〕に広州で中国官僚がローチャ船「アロー」号の乗組員を海賊の嫌疑をかけて捕捉した〔アロー号事件〕。このとき、イギリス人は激怒した。フランス人はフランス人で、ある中国地方官僚が、違法に国内を旅行していたフランス人宣教師を処刑した事件に対し、この官僚は「法による殺人」を犯したとして告発した。こうした苛立ちが結びついて、所謂「第二次アヘン戦争（Second China War）」（1856-1860）が始まった〔アロー戦争ともいう〕。しかし、清朝は、内外からの攻撃に直面したのに、1830年代の後半に実行したほどには、海軍を使った抵抗を挑むための準備をしなかった。実際に、中国は準備不足であった。というのも、第二次アヘン戦争で西洋側の主要敵国であるイギリスとフランスは、アヘン戦争以来、海軍革命に競って乗り出していたからである。そしてその海軍革命を経て、帆から蒸気へ、木から鉄へ、実弾を放つシングルキャストの前装砲から、炸裂する砲弾を使用する組立式の後装ライフル艦砲へと進化したのである。<sup>51)</sup>

広州及び大沽の双方における、第二次アヘン戦争の戦闘を注意深く吟味すると、中国の海防は変わっていなかったことが分かる。<sup>52)</sup>広州は、遂に1857年12月に開城された（イギリス人は、アヘン



戦争後に彼らが広州に入る権利を有すると主張したにもかかわらず、ずっと締め出されていた)。広州開城戦は、全て広州に向かう河水路において行われた。1857年6月2日の仏山鎮<sup>ふつざんちん</sup>での戦いは、イギリスにいくらかの損失をもたらした。戦闘では、20隻の軍用ジャンク船に対する戦闘のほとんどを、7隻のイギリス小型船が行った。この戦いを論評する中で、英国海軍提督シーモア (Seymour) は、それは「中国海軍の戦争における新時代」を開いたと書いた<sup>53)</sup>。シーモアは、参加したジャンク船の数に言及していたのかも知れないし、あるいは防御者の決意に言及していたのかも知れない。というのも、広州区域における技術的進歩は、火船（それらは、可燃物だけでなく、爆発物が詰め込まれていた）及び機雷を使った防御術における進歩に限られていた<sup>54)</sup>。多くの軍用ジャンク船が実際は武装した商用ジャンク船に過ぎないことは、既に注目されてきた。広州付近での戦闘の一時期、清朝正規軍は、外国蒸気郵便船の「ジストル (Thistle)」号を押収した（軍の嫌悪感を催させる策略により、これを彼らは乗客として実行した）。しかし軍は、そのときその船を焼き払ったのである<sup>56)</sup>。イギリス軍に抵抗するのか、あるいは近くの太平天国の乱に対抗するのか、いずれにしても、清朝のためにその船の蒸気エンジンを使用することを考え付いた者は、誰もいなかった。戦略は、変わっていなかった。これは、決して「新時代」ではなかった。

第二次アヘン戦争で最も有名な戦闘は、1859年に大沽で英仏軍を撃退した戦闘である。1858年〔4月〕条約改正に向けて、30隻から成る西洋艦隊（24隻が汽船であった）が大沽にやって来た。天津と京師への進入路を防御する大規模な海岸砲床には、140余りの大砲が備え付けられていた。その砲弾の一部は散弾であり、イギリス海軍で使用するような中空の8インチ弾であったにせよ、中国側の防御は、規模が大きく且つ伝統的であった。1858年〔5月20日〕連合国は、激しい戦闘のすえ大沽の要塞を占領した。その後、一路天津に進軍し、天津条約〔の締結〕を指図した。批准書は、北京の城内で1859年に取り交わされることになっていた<sup>57)</sup>。

この侵略に対する中国の応答は、精力的であったが、伝統に忠実であった。1767年に解散された天津水師が復活した。大沽の要塞が再建・拡張され、杭、鎖、防材、間断のない岸から岸への筏船によって補われた<sup>58)</sup>。1859年〔6月〕連合国は、大沽で撃退された。条約の批准書を交換するため北京入りしようとするこの地に戻った時の出来事である。汽船の「リー (Lee)」号と「ケストレル (Kestrel)」号が沈められた。仲間の「プロバー (Plover)」号と「コーモラント (Cormorant)」号は、座礁したまま見捨てられた。約100名の攻撃兵が殺され、350名が負傷した<sup>59)</sup>。中国のこの快勝は、伝統的な防衛体制の正しさを立証するかのよう思われた。

1860年に連合国が約100隻の艦船と2万近く of 兵士と共に戻ってきた。彼らは、〔8月21日〕大沽の要塞を背後から攻撃し、再び占領した。イギリス軍は、この戦いで初めて組み立て式のアームストロング製ライフル艦砲を使用した。中国側の兵器は、様々であった。攻め落とされた大砲の一部は、「プロヴァー」号や「リー」号、「コーモラント」号から接収されたものであった。なかには真鍮製の砲架があり、イギリス側の報告書の言葉を借りると、「左右二連式の鳥銃にならって」、頑丈な木造の砲架の上に左右両側に取り付けられた事例があった。他の大砲は、「木製で、周りを革紐で縛られ、鉄の箍<sup>たが</sup>をはめられていた」。侵略者は一種の地雷も見つけたが、それは13インチの容器と仕掛けの紐<sup>ひも</sup> (trip-string) で造られていた。連合国が北京に進軍した際に、陸上では不屈の抵抗が存在した。しかし、敗退したのである。そして天津条約は、1860年の夏に（連合国による円明園の掠奪と破壊の後で）京師の城内で力づくで批准された<sup>60)</sup>。最終的な行動が京師で起

こったという事実、それに中国が注目すべき一つの勝利を挙げた事実を除けば、第二次アヘン戦争は、中国海軍の反応を学ぶ者が関わる限りでは、実質的には単なるアヘン戦争の再演に過ぎなかった。

1860年代の満漢指導者の中には、海軍近代化について考え始める者がいた。そして、彼らの諸提案は履行された。こうしたことは、図らずも、国内外の圧力、宮廷首脳部の変化、それに一定の地方官僚と宮廷の関係について、変化の連鎖を産み出した。

遂に西洋は、朝貢の仕組みを解体することに成功した。その仕組みによって、連合国は、二三の貿易拠点における中国の周辺部にずっと置いておかれたままであった。そして、叩頭をともなう昔からの儀礼により、訪問者が従属者であることを明確に示した場合のみ、京師入場が許されてきたのである。天津条約は、より進んだ優位性を西洋に与えた。すなわち、条約が規定するのは、北京における外交使節の駐在、より多くの条約港、外国人による国内旅行及びキリスト教布教活動の開放であった。連合国軍が北京に接近したことにより、咸豊帝は蒙塵し、その死を早めた。帝の死は、続いて、同治帝による統治の開始を告げる1861年のクーデターをもたらしした。ところが同治帝は、満洲人の比較的開明的なグループにより制御されていた。その中で最も傑出していた恭親王〔奕訢〕は、亡くなった咸豊帝の異母弟である。恭親王は、軍機処だけでなく、新設の總理衙門も指導した。總理衙門は外務官庁の一種である。満洲人の眼で見ると一時的な譲歩であるものの、適切な外交関係を求める西洋側の要求に対処するため設立されたのである。実際、總理衙門は、世紀の移り変わるまで存続し、海軍の刷新を含む改革に関わることになったのである。<sup>61)</sup>

太平天国の乱における行動様式の変化は、この諸事件の連鎖の中でも重要であった。1860年以後、叛乱は長江下流に達した。ここでは、他の場所より外国艦船がよく知られていた。満洲軍が役に立たないことが証明されていたため、清朝も、叛乱を打破するべく否応なく中国官僚の奮闘に依存するようになった。<sup>62)</sup> 曾国藩は、1860年に两江総督となり、江南全域で太平天国軍を鎮圧するために欽差大臣に任命された。曾は1850年代の初め以来、湖南で私人的に組織された湘軍を創設し、訓練し、使用してきたのである。中央による公的任命を重大な地方軍勢力と結び付けるこの連鎖は、清朝が長らく避けようと努めてきたことであった。曾は、部下を特定の区域に派遣し、その地を平定させた。曾によるこれらの指令は、明文化された皇帝の指令によって追認された。こうして、1862年の初め〔1月23日〕に左宗棠が浙江巡撫に任命され、短い期間だが閩浙総督になった〔任期は1863年5月～1866年9月迄〕。この時、もう一人の曾の補佐役である李鴻章が、〔1862年4月25日〕署理江蘇巡撫となっていた〔同年12月3日実授〕。これら3人の忠実な中国官僚は、いわゆる同治中興の象徴であった。同治中興は、太平天国軍の攻撃により甚大な被害を受けた後の王朝を復興——復興には想定される歴史的先例があり、且つ深甚な理念的・実践的付随物があった——しようとした。<sup>63)</sup> 3人のいずれもが軍隊を指揮し、通常は地方官僚が行使することはない権力を享受した。各人は、個人的な流儀で、陸海軍の改革を含めた改革を唱道するようになった。

1860年代の初め、国内外の利害を含めた複雑な政治状況が、上海で進展した。貿易は上海港で継続し、重要な財源と利益を伴った。1860年に太平天国軍が長江下流で戦闘を始めた時、上海の中国人は、既に志願兵による傭兵軍を組織していた。いわゆる「常勝軍」である。軍は、進取

の気概のある米国人ウォード（F. T. Ward）により指揮されていた。ウォードは、以前「コンフェューシャス」号の船員であった。太平天国の乱に関して、イギリスは、公的には中立であった。しかし、1861年の初めにホープ提督は、太平天国との間で協定を結んだ。協定では、叛乱軍が上海から少なくとも30マイル〔約 48.3 km〕離れた場所に居る限り、イギリスは中立であり続けることが合意された。<sup>64)</sup>

大体この頃、北京は、安徽に居た欽差大臣袁甲三<sup>えんこうさん</sup>により、ロシアとフランスが清朝に艦船と兵士を申し出たことを知らされた。この申し出に対する北京の反応は、とりわけイギリスが同様の申し出をするまで話が進んだ時には、疑り深いものであった。<sup>65)</sup> 外国人は、互いに反目していたのであろうか——一つの現実的な可能性は、イギリスがロシアに対して深い不信感を抱いており、そしてフランスとは海軍競争をしていたからである。イギリスは、中国沿海から海賊を一掃するという重要な負担も背負い込んでいた。王朝を強化することは、この負担を取り払うであろうし、そして（北京に居たイギリス公使フレデリック・ブルース Frederick Bruce の見方では）外交問題を平易にする、中国における権力の中央集権化も伴うであろう。<sup>66)</sup>

外国人の京師駐在は、海軍改革に働きかける一要因であった。というのも、彼らは直接恭親王と接触でき、公式の儒教的通信手段に典型的に示されるような精巧な書式を必要としなかったからである。彼らは、恐れるものも持たなかった。ロバート・ハート（Robert Hart）は、新たに組織された海関で中国に雇用されたイギリス人である。1861年6月にハートは、中国が王朝海軍力を強化するためにイギリスから汽船小艦隊を購入するよう恭親王に提案している。中立のイギリスの大臣として、ブルースは、当時は公式に関わらなかった。ここには、不幸なレイ・オズボーン艦隊計画の起源があった。——そのように言われるのは、以下のような理由からである。すなわち当時、海関の総税務司であったホラティオ・ネルソン・レイは、イギリスで休暇中であったが、恭親王に実際に艦船の購買を認められた。そして、今度はレイが、イギリス海軍司令官のシェラード・オズボーン（Sherard Osborn）に購買した小艦隊を指揮するよう指示したのである。<sup>67)</sup>

レイ・オズボーン艦隊計画は、不幸と言われている。その理由は、中国が購買した8隻の艦船は1863年の末に返却されたが、叛乱の終結或いは海賊の帰順に何の貢献もしなかったからである。それにもかかわらず、事件から教訓は得られた。曾国藩は、上述したようなフランスとロシアの申し出について諮問された時に、汽船は河上の戦いに使いにくいとして、中国は汽船を必要としないと返答したのである。<sup>68)</sup> 1861年9月に叛乱軍から安慶<sup>あんけい</sup>を奪取して以後、曾は、造船所と兵器製造工場とともに、総司令部をその地に設けた。ハートの提案に関する宮廷側からの問い合わせに対して、曾の返答は、汽船の取得による中国の直接的利益について決して熱狂的ではなかった。しかし曾は、将来中国を強くするために中国が艦船を購入し、研究して差し支えないことを理解していた。曾は、艦船を購入し、外国人官員とともに配置すること、しかし、それらの乗組員は、湘軍から引き抜かれた曾の部下によって構成されるべきことを提議した。曾の汽船に対する長期的関心は、〔北京の中央政府が管理するのではない〕地方的な汽船の購買、すなわち彼が以前見た最初の汽船の購買により示されている。レイ・オズボーン艦隊の人員配置に向けた曾の提案は、これらの艦船も「彼のもの」にするつもりであったことを示している。<sup>69)</sup>

イギリスにおいて、レイは、イギリス政府と長期に及ぶ交渉に従事した。レイは、政府に中国の内金<sup>うちきん</sup>で艦船を購入することに許しを求め、そこに勤務するイギリス海軍の将校と兵士を兵籍に

入れるための権威を必要としていた（イギリスは、1863年1月9日の枢密院令が、英国陸海軍の人員が中国正規軍に半給で勤務することを許可するまで中立であった）。レイは8隻の艦船を購入し、オズボーンを雇った。レイは、オズボーンと秘密裏に個人的な合意を交わした。密約で規定されたのは、オズボーンが、中国が購入した8隻の艦船と他の全ての外国製艦船を指揮すること、それに、この汽船艦隊は、——もし彼が妥当であると考えたら、レイが単独で皇帝の指令を伝達することを除いて——皇帝の指令にのみ服従することである。この合意が恭親王に知られることになったとき、恭親王は、もちろんキツパリと拒絶した。そのようなことをすれば、レイは、——年齢は大体30歳ほどであり、恭親王にとっては皇帝の雇用人に過ぎない——最上席の海軍提督（admiralissimo）になるだけでなく、時の試練を経た中国の地方分権化を崩壊させるであろう。中国の地方分権化は、いまや更にいっそう明白になっていたのである。ブルースですら、強化された「中国の幹部」に期待を寄せて、レイの位置から後戻りしなければならなかった。北京での込み入った交渉は、アメリカ公使アンソン・バーリンゲーム（Anson Burlingame）を巻き込んだ（彼は、もし艦隊が解散されれば、艦船はアメリカ南部連合国の所有に帰し、そうすると南北戦争での北部諸州の大義を傷つけることを恐れた）。そして、オズボーンがレイとの合意に背くことを断固として拒絶したとき、艦船を返却する以外に方法は無いと最終的に決定された。艦船は、1863年まで、約3箇月しか中国の海に滞在しなかったのである。

レイとオズボーンの間で合意が恭親王に知られる以前か、或いは艦船が中国にやって来る以前に、宮廷は艦船の使用について曾国藩と連絡を取っていた。曾の購入した汽船は取り壊されたが、彼の補佐官である蔡国祥さいこくしょうにより安慶内軍械所で建造された別の1隻があった。1862年の初めに、曾はこの小型ランチ船「黄鹄」こうこくに乗っており、その出来映えに非常に満悦していた。エンジンを造った徐寿じょじゅうは、以前に蒸気機関を視た経験をもつ唯一の人物であった。そして彼は、この船を主にホブソンの著した『自然哲学』の翻訳の中で読んだ記述から建造したのである。曾は今や、彼自身の造船所で建造した汽船を有した。そして、レイ＝オズボーン艦隊の司令官に昇進させること70)で蔡国祥に報奨を与えるつもりでいた。乗組員は、もちろん湖南人であった。そして、曾はさらに、艦船をどこで使用するかについて明確な考えを持っていた。彼は、汽船を自分の思い通りにすることに慣れていて、曾が李鴻章を上海に派遣することを切望した上海商人たちは、10隻の外国汽船を借りて、李の軍隊を安慶から下流に輸送するために派遣した。軍の輸送は、1862年4月に実行された。ところで、もし宮廷が後になって、ブルースやレイ、オズボーンに対して、曾が単独でレイ＝オズボーン艦隊の指揮を執るべきであると頑固に言い張ったなら、曾の艦隊に対する支配が強くなり過ぎることが懸念されたであろう。宮廷と曾との間の往復文書では、艦隊の人員は、数人の湖南人を含め、満洲人やフィリピン人、それに他省の者を配置することについて宮廷側から続けざまに提案されていた。そして、艦隊は——海上を北京に向けて北方に接近することを防御するためですら——曾の出身地である湖南省から遠く離れた場所に出征する際に使用されるとの提議が含まれていた。曾は、礼儀正しく彼自身の考えに執着した。最終的に決裂することになったときでも、彼はまだ乗組員について議論していた。そして、艦隊の支払いが既に部分的に履行され、彼の造船技師に研究と模造のために素晴らしい試作モデルを確実に与えられていたとはいえ、彼は艦隊を持ち続けようと強く試みるつもりはなかった。李鴻章について言えば、艦隊が上海にあった短い期間中における彼の奮闘の一つは、オズボーンのイギリス人水夫を彼自



身の任務に誘い込むことであった。<sup>71)</sup>

海軍の近代化は、曾国藩により信奉されたように、政治的な考慮を必要としていた。同時代の学識のある一西洋人は、次のように言っている。

中国政府は、……外国式訓練と外国製兵器の使用に習熟した、一定数の軍隊を持つことを望んだものの、その一線を超えて前進したいという願望を決して表に出さなかった。それに、たとえ政府が領土のあらゆる地域で雇用できる小さな精鋭軍を創設することによって、軍事制度を大いに変革したいと望んでいたとしても、曾国藩や他の地方督撫たち（generals）の反対に遭っては、実行することはできなかった。彼ら〔の発言力が強い理由〕は、長年にわたり叛乱軍と対峙しつづけ、その鎮定に成功したからである。私は、敢えて言う。北京官界の満洲人グループは、ずっと軍事改革に反対してはいなかった。なぜなら、華南及び華中における曾国藩、曾国荃、李〔鴻章〕及び他の漢人官僚の影響力と権力が強まる中で、軍事改革は、彼らの勢力と均衡を取るための重しになってきたからである。ところで、曾国藩らは、そうした刷新に抵抗することで人々の支持を得ていたのである。<sup>72)</sup>

レイ＝オズボーン艦隊が失敗した原因は、レイとオズボーンが過剰な野心を抱き、北京と曾国藩の間で意見が対立したことを除けば、それ以外にもう一つ挙げられる。曾国藩の弟、曾国荃<sup>そうこくせん</sup>は、外国の助けを借りずに、自力で南京を取り戻すことを望んだ。その理由は、期待される南京の掠奪物〔太平天国の遺した財物〕の分配をめぐる、恭親王がレイと協定を結んでいたからである。協定では、オズボーン艦隊に少なくとも財物の三分の一を与え、〔中国の官兵の力を借りずに〕独力で南京を奪還した場合は、その十分の七をオズボーンに与えることを認めていたのである。<sup>73)</sup>

レイ＝オズボーン事件は、海軍近代化の一部始終において、のちに様々な形で現れる幾つかの複雑なものを例証する。しかし、海軍近代化にとって良い兆候であるという一側面があった。イギリス自身の海軍革命は、フランスとの競争により急がれたのだが、新趣向に満ちていた。そして、陳腐になるのが速かった。中国は、イギリスが東の間の興味を有した艦船の幾つかを入手することができた。1863年5月8日付のロンドン『タイムズ』は、レイ＝オズボーン艦隊の船の一つである「江西（Kiangsi）」号（「これまで見た中で最も素晴らしいモデルの一つ」）に注目し、18ノット〔時速33.3km〕が可能で、この241フィート〔73.5m〕の船は、試運転で、「海軍関係の全ての科学者が異口同音に最も海上で高速の船の一つであると表明した」というような「並外れた」結果を産み出したと報じた。しかしながら、「江西」号は、木製であった。1860年に、イギリス海軍は、「ウォーリア（Warrior）」号を受け取った。「ウォーリア」号は、蒸気機関で動く鉄製装甲フリゲート艦であり、全長は380フィート〔115.8m〕であった。「江西」号は、時代遅れであった。<sup>74)</sup>

李鴻章は、汽船の価値を高く評価した。そして、上述したように、彼の軍隊〔淮軍〕を数隻の汽船に乗せて上海に移動した。1863年2月に、彼は曾に対し、西洋諸国の「独創的で均質な」カノン砲とともに、その「素晴らしい」船について論評している。彼は、西洋諸国がこれまで中国に最上の船とカノン砲をもってきたかどうかを疑った。また彼は、中国人は学ぶ意欲を持たない

と述べている。李は、<sup>75)</sup> 学ぶことを厭わなかった。

しかしながら、李鴻章は、兵器と地上兵力の飾り物に最も関心を持っていたように思われる。1863年8月に、彼は常勝軍(李の部下であるチャールズ・ゴードン(Charles Gordon)の指揮の下で今や再編成された)が、李の松江砲局で造られた弾薬を使って勝利するのを見た。<sup>76)</sup> 1864年の初めに、李はこの松江砲局を蘇州に移した〔蘇州洋砲局〕。そして、彼のイギリス人兵器製造工場管理人であるホリデイ・マカートニー(Holliday Macartney もとイギリス軍医)は、工場のためにいくつかの機械を購入した。それは、抜け目のないオズボーンが個人で販売しようと自分の小艦隊で中国に持ち込んだ機械であった。李は最初、これらの「ちっぽけな鉄」の値段に腹を立てた。しかし、マカートニーが李に検分してもらおうと機械を劇的に始動した時、大いに喜んだ。<sup>77)</sup> 李は、外国人に全面的に依存することを好まなかった。それゆえ、上海にさらに二つの兵器工場施設を設立し、一つは軍人の韓殿甲かんてんこうの下に置き、もう一つは上海道台ていにちしやう丁日昌の下に置いた。韓の工場施設は、全面的に中国人により作動された。1864年に曾国荃により叛乱軍から南京を奪い返した後、曾国藩は彼の安慶の設備〔安慶内軍械所〕を南京に移動した。李鴻章が南京で総督〔署理两江総督〕に就任した1865年の春に、李は蘇州の工場施設の一部を南京に移し〔金陵機器局〕、その残りを上海に移した。李の機械は、曾国藩のためにようこう容閔によりアメリカで購入された他の設備と組み合わせて、江南製造局の土台であった。<sup>78)</sup>

曾国藩の部下について言えば、汽船に最もはっきりとした関心を表したのは、さそうとう左宗棠であった。1862年に、左が浙江巡撫であったとき、部下の一人が汽船を軍事視察や徴税を容易にするために使用した。左は、1862年から1865年までの数年間に、責任が重くなるに伴い、汽船の使用を次第に増やすようになった。これらの責任の中の一つは、叛乱の鎮圧を除けば、海賊に対処することであった。彼は汽船について懸念を持っていた。運転資金がかさむからである。それに彼は、適当な船を入手し、且つそれを適切に使用するには、専門家が必要であることに気付いていた。彼は、伝統的な海船を徹底的に取り除くことを夢見ていたわけではなかったにせよ、汽船を軍艦として使用することを目指した。1864年に、次のように書いている。「我々は、彼らが扱っている当にその武器を通じて外国人からその優位性を奪うために汽船を模倣しなければならない。我々は、今や間近に控えている条約改定に際して当惑する必要はないのである。<sup>79)</sup>」

指導者の曾、李、左について言えば、<sup>80)</sup> 左だけが独り林則徐の考えに恩義を表した。彼は、賃借りしている汽船を信用しなかった。というのも、関係する外国人が、中国側の利害に奉仕するより他に、別の目的を持っているかも知れないからである。彼は、汽船の建造を試みたが、それには失望させられた。失望した結果、彼は、大規模な造船に奮闘する方向へと傾斜した。彼は公式に造船事業を唱道したのは、イギリスが、海賊から防護する力量を向上させるよう力説したことにより促された。レイ＝オズボーン事件の失敗後、イギリスは、遂に国際巡察の計画を思い付いた。巡察には、中国と諸条約国が協力する。その計画は、複雑であった。1865年4月に、恭親王は、提議された海賊掃討作戦を分担するために、中国が汽船を購入するのは望ましいことかどうか各省に助言を求めた。左は、汽船を購入することに反対した。そして、造船所の設立については、外国人技師に既に助言を求めていたのだが、1865年6月に、<sup>81)</sup> 近代的な造船所の創設に関する公式の提案を行った。彼の唱道から、ふっけんせんせいきよく福建船政局ができた。

国内外の圧力が組み合わさって、これらの人々は、それぞれ彼自身の方法で、陸海軍の改革を唱道した。彼らの名前は、所謂「自強」運動の始まりと関連している。それは、アヘン戦争後20年——決定的な歳月の浪費——を経てはじめて出現したのである。<sup>82)</sup>ところで、これらの「自強運動の担い手たち」は、高官であった。彼らの権力と影響力は、太平天国の乱を鎮圧する際に果たした役割によって高められた。〔それとは対照的に〕アヘン戦争期の点在する海軍実験を始めたのは、身分の低い官僚と商人であった。

ところが、これらの偉大な改革者たちは、おそらく多忙な人達であり、軍事問題に関心を持つだけではなかった。彼らは、海軍改革について奇妙な懸念を持っていた。例えば、福建船政局の父である左宗棠は、決して自分では汽船を使用せず、親族がそれを使用するのを妨げようとした。<sup>83)</sup>しかし、これらの人達の最大の留保条件は、特異な性格を別にすると、儒教的秩序を保存するという約束であった。儒教的秩序は、彼らが太平天国の乱の似而非キリスト教から助け出したばかりであった。彼らの思想を広くかたどった同治中興の考えは、本質においては保守主義であったのである。実際、同治中興について浸透している今日の研究は、『中国保守主義の最終段階 (The Last Stand of Chinese Conservatism)』という題が付けられている。<sup>84)</sup>彼らが望んだのは、外国の軍事技術を限定的に使用することによって儒教体制を保存することであった。——1860年代の初めに馮桂芬<sup>ふうけいふん</sup>により説得力をもって説かれた願望である——しかし、その組み合わせは、矛盾を産み出した。その矛盾は、彼らが最後に着手した海軍改革を妨げることになったのである。<sup>85)</sup>

## 註

- 1) 呂実強『中国早期的輪船経営』（台北，中央研究院近代史研究所，1962年），9頁。
- 2) 呂実強『中国早期的輪船経営』10頁。包遵彭『中国海軍史』（台北，海軍出版社，1951年），121～122頁。Gedeon Chen, *Lin Tse-hsu, Pioneer Promoter of the Adoption of Western Means of Maritime Defense in China* (Peking, 1934), pp. 20-21.
- 3) Chen, *Lin Tse-hsu*, pp. 34-35, 43.
- 4) W. D. Bernard and W. H. Hall, *Narrative of the Voyages and Services of the Nemesis from 1840 to 1843, and of the Combined Naval and Military Operations in China* (London, 1844), II, pp. 222, 296-297.
- 5) Chen, *Lin Tse-hsu*, pp. 35-39. 包遵彭『中国海軍史』130～131頁。
- 6) Chen, *Lin Tse-hsu*, pp. 36-45.
- 7) Bernard and Hall, I, pp. 278-281.
- 8) Chen, *Lin Tse-hsu*, p. 40.
- 9) Bernard and Hall, II, pp. 226-227, 353-354. 呂実強『中国早期的輪船経営』11～12頁。
- 10) 呂実強『中国早期的輪船経営』12頁。Earl Swisher, *China's Management of the American Barbarians* (New Haven, 1953), p. 38.
- 11) 包遵彭『中国海軍史』129～130頁。
- 12) 呂実強『中国早期的輪船経営』28～29頁は、中国は資金と技能を持っていたことを詳細に論じている。
- 13) 例えば、鄧廷楨、祁寓藻、黃爵滋による1840年5月16日付の上奏文は、より多くの軍勢と要塞を求めている。『籌辦夷務始末』道光朝，卷10，19～23頁，参照。裕謙の上奏文は、蛮人の弱点を列挙している。『籌辦夷務始末』道光朝，卷14，10～12頁，参照。軍用ジャンク船や火船等に関する林則徐と怡良の上奏文は、『籌辦夷務始末』道光朝，卷14，41～42頁，参照。伊里布と劉韻珂による1841年

1月26日付の上奏文は、港を仕切ること、ジャンク船を沈めること、漁夫に変装すること等について建議している。『籌辦夷務始末』道光朝、巻20、15頁、18頁、19頁、参照。アヘン戦争については、『籌辦夷務始末』に所収の文書、また以下の文献中に収められた文書の要約と翻訳に基づき要約している。Arthur Waley, *The Opium War Through Chinese Eyes* (London, 1958); P. C. Kuo, *A Critical Study of the First Anglo-Chinese War, with Documents* (Shanghai, 1935); Teng Ssu-yu, *Chang Hsi and the Treaty of Nanking, 1842* (Chicago, 1944).

- 14) 呂実強『中国早期的輪船経営』33～35頁は、これらの上奏文を要約している。
- 15) 鄧等による1840年8月13日付の建議は、Kuo, *A Critical Study of the First Anglo-Chinese War, with Documents*, p. 256, に所収の文書23に見える。林の1840年10月の上奏文は、『籌辦夷務始末』道光朝、巻16、21頁、参照。
- 16) Chen, *Lin Tse-hsu*, p. 20, は『海国図志』を引用している〔林則徐「答奕將軍防禦粵省六条」『海国図志』巻80〕。上奏文が、公的な記録に入らなかったからである。
- 17) 『籌辦夷務始末』道光朝、巻14、10～12頁。
- 18) 鄧廷楨の所説については、註15と同じ文書23を参照。林則徐の主張が前後で相矛盾していることについては、Waley, p. 123, が1840年8月16日の上奏文を引用しているので、参照されたい。道光帝は、林の二枚舌に立腹している〔『籌辦夷務始末』道光朝、巻14、44～45頁〕。
- 19) 呂実強『中国早期的輪船経営』35頁。
- 20) 裕謙による報告である。Kuo, Doc. 28, p. 260, 参照。John K. Fairbank, *Trade and Diplomacy on the China Coast, 1842-1854*, 2 vols. (Cambridge, Mass., 1954), Chap. 1, は、本例だけでなく他の例も挙げている。
- 21) Waley, *The Opium War Through Chinese Eyes*, pp. 85-86.
- 22) 『籌辦夷務始末』道光朝、巻29、3～4頁。
- 23) 1841年1月30日付の琦善による上奏文を参照のこと。『籌辦夷務始末』道光朝、巻20、27～32頁。
- 24) Teng, *Chang Hsi and the Treaty of Nanking, 1842*, pp. 75, 78.
- 25) 宋代以来の外輪船に関する詳細な議論については、Lo Jung-pang, "China's Paddle Wheel Boats," *Tsing Hua Journal of Chinese Studies, New Series*, 2.1: 189-215 (May 1960) を参照のこと。
- 26) Waley, *The Opium War Through Chinese Eyes*, pp. 71.
- 27) *Ibid.*, p. 100.
- 28) 1841年の攻撃に関する虚偽報告に皇帝が立腹したことについては、Kuo, Doc. p. 286 を参照のこと。1842年の報告を受け容れたことについては、Teng, *Chang Hsi and the Treaty of Nanking, 1842*, n. 242, pp. 165-166, を参照のこと。Swisher, *China's Management of the American Barbarians*, New Haven, 1953, pp. 29-30, は、道光帝は、彼の軍隊の兵力について非常に良く報告を受けていたと言う。
- 29) Morse and McNair, *Far Eastern International Relations*, Shanghai, 1928, p. 63, note.
- 30) 呂実強『中国早期的輪船経営』30～33頁は、アヘン戦争後の海軍実験の終わりを説明する際に、道光帝のパーソナリティに重きを置いている。
- 31) 調停の動きに関する再検討については、John L. Fairbank, "Chinese Diplomacy and the Nanking Treaty of 1842," *Journal of Modern History*, 12.1: 1-29 (March 1940) を参照のこと。
- 32) Chen, *Lin Tse-hsu*, Chap. 3, 「宮廷及び諸省の態度」。60頁に引用されている。
- 33) 呂実強『中国早期的輪船経営』36～37頁。30月の見積もりは、丁拱辰の著書『演炮図説』のあとがきに基づいている。彼は『演炮図説』の中で、広州にいる鄧廷楨に彼の仕事に関する情報を——明らかに1839年の末か1840年の初めに——提供したと述べている。Chen, *Lin Tse-hsu*, p. 54 は、このあとがきを引用している。
- 34) 呂実強『中国早期的輪船経営』37頁。
- 35) 呂実強『中国早期的輪船経営』37頁。



- 36) ハンメルにおける奕山の項目を参照のこと〔訳註：Arthur W. Hummel, ed, *Eminent Chinese of the Ch'ing Period, 1644-1911*, vol. I, pp. 391-393.〕。上奏文は、呂実強『中国早期的輪船経営』18～19頁を参照のこと。
- 37) 包遵彭『中国海軍史』132～134頁。
- 38) バーナードの論評については、Bernard and Hall, I, pp. 278-281 参照。*Chinese Repository* (February 1843), p. 108 は、名付けられた船の購買について書いている。購入者の名前は、Swisher, *China's Management of the American Barbarians*, p. 38 にある。
- 39) 呂実強『中国早期的輪船経営』19～20頁は、彼が他の典拠から引用している『籌辦夷務始末』ではなく、『実録』を引用している。
- 40) Chen, *Lin Tse-hsu*, p. 58-59.
- 41) 呂実強『中国早期的輪船経営』37～38頁は、水師提督呉建勳、怡良、耆英・牛鑑・伊里布、その他にも二三の名を挙げている。〔訳註：本書によると、呉建勳は、南韶連総兵馬殿甲、署督糧道西拉本らと米国軍艦を訪問した。怡良は、水師提督竇振彪、署興泉水道劉耀椿とイギリス汽船を訪問した。耆英・牛鑑・伊里布は、イギリス汽船を訪問・視察した。〕
- 42) Chen, *Lin Tse-hsu*, p. 59-60.〔訳註：水雷については、潘仕成「攻船水雷図説上下」『海国図志』巻92, 及び巻93.〕
- 43) 『海国図志』巻1, 1頁, 3頁。魏源は、敵を内水路に誘い込むことについても述べている。
- 44) *Chinese Repository*, 13.11: 603 (November 1844).
- 45) より詳しく論じたものとしては、ジデオ・ン・チェンによる以下の二つの著書を参照のこと。Gideon Chen, *Tseng Kuo-fan, Pioneer Promoter of the Steamship in China* (Peiping, 1935), pp. 9, 18-20, 及び、Tso Tsung-t'ang, *Pioneer Promoter of the Modern Dockyard and the Woolen Mill in China* (Peiping, 1938), pp. 4-6.
- 46) 呉健章の活動については、T. T. Meadows, *The Chinese and Their Rebellions* (London, 1856), pp. 195, 208-210, 284; *British Parliamentary Papers: "Papers Respecting the Civil War in China"* (1853), pp. 3-4; Chen, *Tseng Kuo-fan*, pp. 31-32. を参照のこと。Morse, *International Relations*, I, 406, 421-422, は、上海における他の2隻、すなわち「クラウン (Crown)」号及び「カンプトン (Compton)」号と共に「コンヒューシアス」号に言及する。「コンヒューシアス」号について詳しくは、G. Lanning and S. Couling, *The History of Shanghai* (Shanghai, Hong Kong, Singapore, and Yokohama, 1921), p. 384. を参照のこと。
- 47) Chen, *Tseng Kuo-fan*, pp. 32-33.
- 48) John King, "Progress in China," Pt. 2, *Blackwood's Edinburgh Magazine*, February 1863.
- 49) Swisher, *China's Management of the American Barbarians*, p. 22.
- 50) ハンメルにおける彭玉麟の項目を参照。〔訳註：Arthur W. Hummel, ed, *Eminent Chinese of the Ch'ing Period, 1644-1911*, vol. II, pp. 617-620.〕
- 51) 西洋の海軍革命に関する詳細は、次の二点の中に見られる。Bernard Brodie, *Sea Power in the Machine Age* (Princeton, 1941) ; 及び J. P. Baxter, *The Introduction of the Ironclad Warship* (Cambridge, Mass., 1933).〔訳註：アロー戦争については、坂野正高『中国近代政治外交史』東大出版会、1982年第2刷、234～267頁を翻訳に当たり参考にした。〕
- 52) 第二次アヘン戦争の遠因と戦争の報道取材については、Morse and McNair, *Far Eastern International Relations*, Chap. 10 and 11. 英国の公式報告書に基づく詳細は、D. Bonner-Smith and E. W. R. Lumby, *The Second China War, 1856-1860*, Publications of the Navy Board Society, Vol. 95 (Greenwich: Royal Naval College, 1954).
- 53) 1857年6月10日付、シーモアから海軍本部へ。Bonner-Smith and Lumby, *The Second China War, 1856-1860*, pp. 204-208. 所収。
- 54) Chen, *Tseng Kuo-fan*, p. 10.

- 55) 第1章, 註13, 参照。
- 56) 1856年12月29日付, シーモアから海軍本部へ。Bonner-Smith and Lumby, *The Second China War, 1856-1860*, pp. 151. 所収。1856年12月31日付, バウリングからクラレンドンへ。 *ibid.*, p. 154. 所収。
- 57) 要塞の記述については, 1858年5月14日付, シーモアからエルギンへ。 *ibid.*, p. 328. 所収。他の記述については, 『ノース・チャイナ・ヘラルド (*North China Herald*)』174頁 (1858年5月27日), 186頁 (5月29日), 170頁 (6月19日)。〔訳註: 1858年6月に, 四つの天津条約が結ばれた。すなわち, 6月13日にはロシアと, 18日にはアメリカと, 26日にはイギリスと, 27日にはフランスとの間に締結された。前掲, 坂野正高『中国近代政治外交史』241頁, 参照。〕
- 58) 天津水師の再建については, 『清史稿』「兵志」, 巻6, 7頁, 参照。要塞に関する記述は, 『ノース・チャイナ・ヘラルド』(1859年7月9日)。1859年7月5日付, ホープから海軍本部へ。Bonner-Smith and Lumby, *The Second China War, 1856-1860*, pp. 393-400. 所収。
- 59) 衝突に関する詳細については, Morse, *International Relations*, I, 576-584.
- 60) より詳しくは, *ibid.*, Vol. 1, Chap. 26. を参照のこと。大砲等に関する論評について, より詳しくは, *North China Herald* (Aug. 18, 1860), p. 130; (Sept. 8, 1860), p. 43; (Sept. 22, 1860), p. 151. を参照のこと。
- 61) 総理衙門に関する労作については, Meng Ssu-ming, "The Organization and Functions of the Tsungli Yamen," Ph. D. thesis (Harvard, 1949), Chap. 5 and 6. を参照のこと。〔総理衙門は, 1901年に外務部になった。〕
- 62) Li Chien-nung, *The Political History of China, 1840-1928*, tr. Ssu-yu Teng and Jeremy Ingalls (New York, 1956), pp. 70-75. は, 1860年の叛乱と条約の段階を分岐点として論じている。
- 63) 歴史的先例に関する序論を含め, 同治中興に関する労作として, Mary Wright, *The Last Stand of Chinese Conservatism* (Stanford, 1957). を参照のこと。
- 64) 常勝軍とウォードについては, Morse and McNair, *Far Eastern International Relations*, p. 338. を参照のこと。ホープ提督の協定については, Andrew Wilson, *The Ever-Victorious Army* (London, 1868), p. 388. を参照のこと。
- 65) 袁甲三の上奏文については, 『籌辦夷務始末』咸豊朝, 巻71, 34頁, 参照。その問題に関する曾国藩からの上奏文と皇帝の反応については, 『籌辦夷務始末』咸豊朝, 巻72, 3~9頁, 参照。
- 66) イギリス側の見解の例としては, *BPP: Further Papers Relative to the Rebellion in China*, 1863, p. 9に収められた, 1862年5月13日付, ブルースからラッセルへ。1862年10月24日付, ブルースからステイプリへ。これは, *ibid.*, p. 154に所収の1862年11月25日付, ブルースからラッセルへ, に封入されている。 *ibid.*, p. 146に収められた, 1862年11月22日付, ブルースからクーパーへ。以上を参照のこと。
- 67) レイ・オズボーン艦隊の部分は, John L. Rawlinson, "The Lay-Osborn Flotilla: Its Development and Significance," *Papers on China*, 4: 58-93 (Harvard University, East Asian Research Center, 1950). に基づく。二三の特有の参考文献については, 以下の註にて挙げることにする。
- 68) 『籌辦夷務始末』咸豊朝, 巻72, 3頁, 1861年1月19日付。
- 69) 『籌辦夷務始末』同治朝, 巻1, 22頁, 1861年9月9日付。
- 70) 「黄鹄」号とその建造者に関する詳細は, 興味深い。Chen, *Tseng Kuo-fan*, p. 40-42; *North China Herald and Market Report*, Sept. 5, 1868, p. 427, and Jan. 29, 1880, p. 22. を参照のこと。
- 71) 曾国藩と宮廷の間の往復文書については, 以下を参照のこと。1861年9月9日付, 曾国藩の上奏文は, 『籌辦夷務始末』同治朝, 巻1, 22頁。1862年2月9日付, 上諭は, 『籌辦夷務始末』同治朝, 巻4, 9~12頁。1862年1月24日付, 曾国藩の上奏文と上諭は, 『籌辦夷務始末』同治朝, 巻4, 51~52頁。1862年11月18日付, 恭親王の上奏文と同じ日付の上諭は, 『籌辦夷務始末』同治朝, 巻10, 16頁, 20頁。1863年2月7日付, 曾国藩の上奏文と上諭は, 『籌辦夷務始末』同治朝, 巻12, 35~37頁。

- 1863年11月17日付、曾国藩の書簡は、『籌辦夷務始末』同治朝、卷21、19頁。
- 72) Andrew Wilson, *Lieutenant-Colonel Gordon's Chinese Campaigns and the Taiping Rebellion* (Edinburgh and London, 1868), pp. 265-266.
- 73) 呂実強『中国早期的輪船経営』115～116頁。
- 74) 「ウォーリア」号について詳しくは、Baxter, *The Introduction of the Ironclad Warship*, pp. 155-159.
- 75) 李の書簡の翻訳については、Teng Ssu-yu and John K. Fairbank, *China's Response to the West* (Cambridge, Mass., 1954), p. 69, 参照。
- 76) Dometrius C. Boulger, *The Life of Sir Halliday Macartney*, K. C. M. G. (New York and London, 1908), p. 79.
- 77) オズボーンの機械については、Boulger, *The Life of Sir Halliday Macartney*, pp. 125-131, 参照。
- 78) 李の工場施設における中国人については、全漢昇「清季の江南製造局」（台湾、1951年）146～147頁、及び、Stanley Spector, *Li Hung-chang and Huai Army* (Seattle, 1964), pp. 155-157, 参照。
- 79) Chen, *Tso Tsung-t'ang*, pp. 8-13. 引用文は、12～13頁にある。
- 80) *Ibid.*, pp. 1-4.
- 81) 海賊問題及び提案に関する論議については、Grace Fox, *British Admirals and Chinese Pirates, 1832-1869*, London, 1940, pp. 150-172. を参照すると、十分に論じられている。左の提議については、Chen, *Tso Tsung-t'ang*, p. 17, 参照。上奏文は、『船政奏議彙編』巻1、1～8頁、1866年6月25日付、にある。
- 82) 「自強」思想に関する議論については、Teng and Fairbank, *China's Response to the West*, Chap. 5.
- 83) Chen, *Tso Tsung-t'ang*, pp. 80-81.
- 84) 註63を参照のこと。
- 85) 馮桂芬については、Teng and Fairbank, *China's Response to the West*, pp. 50-55.

